ざっくり理解する気候変動　井川夕慈著より

気候変動と環境経営(10－3)

Green Transformation
(GX は本当に稼げるのか)

1 月②-3 のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2026 年 1 月 15 日(木)

日経 LIVE で GX（グリーントランスフォーメーション）の座談会を聴いた。
ＧＸの欧州、日本、米国の現況は、欧州では「一服感」、日本は「今年から本格化」、米国は「トランプ発言による無視」というような外観を呈している。
今朝の朝刊を見ると、2025 年の米国の温室効果ガス排出量が前年比 2.4%の増加となったとの分析結果が発表された。
過去 2 年連続の減少から一転して増加した。
AI 普及に伴って大量の電力を必要とするデータセンターが増えたことや、厳冬で暖房使用が多かったことが背景にあるとしている。

日本では、2025 年 2 月の閣議決定、「成長志向型カーボンプライシング構想」の具体化を進めており、①GX 経済移行債 20 兆円規模の投資促進策、②段階的なカーボンプライシング（排出量取引・化石燃料賦課金）の導入、③新たな金融手法の活用など、経済成長、排出削減、安定供給へ向けていよいよ開始した感がある。欧州の一服感に対して、心強い感じがある。
欧州では、ベニスの水没の進行やオランダの国土の湿地化など国土環境から見て、一服することはできないと思う。

「両利きの経営」、先ずやって見ること、「やってみることで見えないことも見えてくる」。
これは不確実な GX 時代を勝ち抜くための最も重要な羅針盤である。
左手（現在の飯のタネ＝知の深化）は、守りの GX。右手（将来の飯のタネ＝知の探索）は、攻めの GX。将来の市場ルールが変わった時に、一気に覇権を握るための布石。左で稼ぎながら、右を今のうちに育てる。

なぜ、「やってみる」と見えないものが見えるのか。それは GX は、過去のデータが役に立たない「非連続な変化」のためである。机上の計算では見えない隠れたコスト、取引先からのデータ収集、現場の抵抗、新たな顧客ニーズは見えないリスクを見えるようにしてくれる。